序文
劇作家 D.H. ロレンス　（翻訳）（5）

D.H. ロレンス，『戯曲集』
編者：ハンス―ウィルヘルム・シュワルツェ＆ジョン・ワーゼン
（出版社：CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 出版年：1999 年）

（訳者）　高橋　克明*・後藤　眞琴**

Katsuaki Takahashi and Makoto Goto

1966-8.『ホルロイド夫人やもめになる』,『嫁』,『炭坑夫の金曜日の夜』および『バーバラ争奪戦』の上演

1965 年に湧き起ったロレンスの戯曲に対する世間の関心の波に乗って，クライヴ・ペリーは 1966 年 6 月 14 日から 25 日までレスターのフェニック劇場（Phoenix Theatre）で『ホルロイド夫人やもめになる』を演出した。R.P. ドレイパーは劇のプログラムに載せる簡単な解説を寄せて，その解説で『ホルロイド夫人やもめになる』の戯曲の言語が「小説の言語とは違っている」ことを賞賛し，「その戯曲には詩的輝きを放つすばらしいくだりは一つもなく，劇作家としてロレンスは 20 世紀初期の額縁劇場のリアリスティクで，平凡な要求に応じることに精を出し……その結果，簡潔で，説得力のある無駄のない家庭劇になっている。」と評している。[236]『デイリー・テレグラフ』の劇評家はさらに「実際，演劇を簡単に統制する力と，対話だけで性格を詳細に観察する能力が示されたこのような戯曲を，一人の小説家が書いたなどとはまったく思いもしないでしょう。」と，述べている。[237] 決定的な飛躍がなされたのは『嫁』が―『嫁』は『戯曲全集』に出版された時，数人の劇評家の注目を浴びていた―ついに劇場の観客に演じられた 6 か月後であった。1967 年の初めに，『嫁』はエディンバラ，ロンドン，シェフィールドで立て続けに上演されて，演出家，俳優及び観客がこれこそ自分たちが探していたロレンスの戯曲であると気づいた時, BBC 第 3 番組でも放送された。それは概して好評であったが，『嫁』は上演されるたびに，その評価はよくなり，劇作家としてのロレンスの才能に以前は批判的であった劇評家による評価さえもよくなった。『タイムズ』はトラヴァース劇場（Traverse Theatre）でのエディンバラ上演（ゴードン・マクドゥーガル演出）を評して（1 月 28 日），「その戯曲の最善の場面は現実そのままであり，思いやりがあり……それは心にしみこんで，すばらしく，大きな衝撃を与える」と述べている（13 ページ）。しかし,『ステージ』（1 月 26 日）の劇評家は『嫁』は「面白味のない絵のような労働者階級の生活を描いている」と述べ,「その戯曲には真のクライマックスがなく……その戯曲はその筋をたゆまずのろのろとたどりすぎるので, 演劇に少しも熱中できない」と言っている（16 ページ）。しかしながら，ロンドンで，『嫁』はロイヤル・コート（Royal Court）劇場でピーター・ギルによって演出され，キャストには『炭坑夫の金曜日の夜』に出演した俳優の二人を登場させて，この上ない成功を収めた。『タイムズ』（3 月 17 日）のアーヴィング・ウォードルは「救いがたい緊張感，感情がいかに変わり続けても登場人物たちを永久に結びつけておく絆」に注目した（12 ページ）。『オブザーバー』（3 月 19 日）のロナルド・ブライドンは「それによって戦後私たちが試みた労働者階級の演劇の大部分は薄っぺらなもののように見える」と思い（25 ページ），編集者に次のように述べている。

> 行間の感情。これは今ではさほど革命的には見えないかもしれませんが，当時はハロルド・ピンターの作品はそれほど発展していませんでしたし，それほど広く模倣

2014 年 10 月 21 日受理
* 東北工業大学客員教授
** 東北大学名誉教授

されてもいませんでした（1983年2月17日，編集者宛ての手紙）。

『ステージ』（3月23日）のR.B.マリオットは『嫁』を「情熱的で，洞察力のある，きわめて感動的な演劇」と呼んでいる（13ページ）。一方，フランク・マーカスは，『プレイズ・アンド・プレイアーズ』で，次のように問いかける。

D.H.ロレンスは偉大な劇作家であったのか？違う，だが，彼はこのようなすばらしい上演を見ることができたなら，そうなったかもしれない。その夫婦喧嘩はとてつもなく真に迫っている。彼はそれに基づいてすばらしい戯曲を書くことができたかもしれない。彼は幕切れのせりふを書き直すことができたかもしれない。彼はあえて徹底した自然主義を越えて行くことができたかもしれない。彼は自分が感情的な真実を提供しているのをわかっていた。彼はその真実を演劇の言葉で表現できるようになっていたかもしれない……優れた戯曲である『嫁』がこれまで上演されないでいたのはほとんど信じられないように思われる……[238]

次の3年の間に，『嫁』はロンドンで再び上演されただけでなく，リンカーン，ハロゲット，クルー，ノッティンガム，ホーンチャーチ，ファーナム，ダービーでも上演された。[239]

演出家たちはロレンスの上演されていない他の戯曲を今や探し求めていて，ロビン・ミジリーは『バーバラ争奪戦』をロンドンのマーメイド劇場（Mermaid Theatre）で上演した。それは1967年8月9日に開演した。使用された原文は，もちろん，『戯曲全集』にある短縮したものであったので，これがその演出家の大きな問題になった。『バーバラ争奪戦』（約90分続く）はまる一晩それだけを演ずる劇場には短すぎた。その問題は，ロレンス自身，フリーダ，フリーダの最初の夫のアーネスト・ウィークリーに関するロレンスの他の作品から選んだものを，「男たちと女たち」という表題で，その夕べの公演の前半として上演し，ロレンスの他の作品から選んだものを演じた俳優たちが『バーバラ争奪戦』の中で適切な役を演じることによって，克服されたがその上演の性質はまったく変わった。『バーバラ争奪戦』はこうして純粋な自叙伝として上演されたが，舞台装置によって裏付けられていたものもあり―その舞台装置にはロレンスの描いた絵（15年以上時代遅れであるが）が壁にかかっていた―また，ロレンスとフリーダのたくさんの写真や彼らの生活の年表を転載したプログラムによって裏付けられていたものもあった。[240] こういった関係がこんなにあからさまに強調される必要があるのかと疑問視する劇評家もいた。しかしながら，『タイムズ』の予告は，その劇場の広告に依って，『バーバラ争奪戦』を次のように要約した。「バーバラは，上流階級の女性で……肉体労働者とイタリアへ駆け落ちする……その戯曲はチャタレイ卿夫人のテーマをほうふつさせるばかりでなく，自叙伝的要素が強いと言われている。」[241] と。ミジリーはジョン・オズボーンの1956年の有名な戯曲『怒りをもって振り返れ』のジミー・ポーターと，『バーバラ争奪戦』での（ジミー・ウェスンとしての）ロレンスの自画像との間に「いくつかの類似点」あるのが分かったと言ったと報じられている。[242]

上演で自叙伝的要素が強調されると，劇評家たちは当然その特徴に注意を集中して，ロレンスの他の作品から選んだものを演じることから『バーバラ争奪戦』の上演を始めた結果について論評した。『ガーディアン』のフィリップ・ホープ-ウォレスは『バーバラ争奪戦』を「堅苦しい，半ばストリンドベリ的な作品で，異性間の確執」劇と称した。ホープ-ウォレスはその夕べの公演の前半のロレンスの他の作品から選んだものは「創作した劇よりもはるかに興味深く，示唆に富み，面白い。」と思った。[243] 8月10日の『タイムズ』のアーヴィング・ウォードル（「忘れられていた戯曲が天才の力を示す」）もまたストリンドベリと比較して，「ロレンスの戯曲の忘れられていた古文書から最近発掘されたこの戯曲によって，彼がイギリスの演劇界でストリンドベリに一番近い劇作家であることが再び示されている……その戯曲は本質的に恋人たちの確執であり，こういう条件で自叙伝が輝きだして芸術になるのだ」と，述べている（5ページ）。『デイリー・テレグラフ』（8月10日）の劇評家も『バーバラ争奪戦』の自叙伝的内容を強調して（その表題は「自分自身の逃亡に基づくロレンスの戯曲」となっている），恋人たちの口論の描写を賞賛するが，ロレンスは「マイナーな登場人物たちを十分に活躍させること」ができなかった―おそらく「活躍させ」たくなかった―ので「……これらの人々は真に迫った人間になっていない」と，『バーバラ争奪戦』を批判している（17ページ）。『サンデイ・タイムズ』（8月13日）のハロルド・ホブソンは，その上演はロレンスが「注目に値する劇作家」だという感じが高まっているのをうまく裏付けることができなかったが，「しかし，それはまったくロ

レンスの責任というわけではない。」と思った。ホブソンはその上演をカリカチュア化していると批判して，『バーバラ争奪戦』のダイアローグは「15 歳の子供のエロティックな憂さ晴らしを超えてはいないように私には思われる」と述べている（21 ページ）。『バーバラ争奪戦』は，この上演で，ロレンスが劇作家であるという十分な論拠を提示することはなかった。

これまでのところ最も優れた上演はピーター・ギルによる上演であったことは疑いない。ギルの仕事は，1968 年の初期にロイヤル・コート（Royal Court）劇場でのロレンスの戯曲の季節に，『嫁』を再上演し，『炭坑夫の金曜日の夜』を再び舞台に乗せ，『ホルロイド夫人やもめになる』の新たな上演を付け加えて最高潮に達した。[244] そのプログラムは上演の基調を定めていて，炭坑で使用される言葉と炭坑の歴史や，操業中の炭坑のその当時の写真や，ロレンスのエッセイ一つと数篇の方言詩の原文について愛情をこめて詳細に説明している。[245] ほとんどの劇評家には，念入りに作り上げられ，ゆっくりと進められる上演によって，予期されていなかったそれらの戯曲の深刻な痛切さが明らかになった。それは「正確に，控えめに，誠実に」上演されたのだが，観客はその作品にまったく熱中したのである。[246] 1969 年の『演劇年報』では，ロイヤル・コート劇場でのロレンスの戯曲の季節で「ロレンスは一流の劇作家であることがついに立証された」と主張されることになり（32 ページ），劇評家は次々と，ロレンスは「自然主義の伝統にのっとった一流の劇作家であり，労働者階級の話を理解できる能力では彼にかなう者はいない」という『ニュー・ステイツマン』のフィリップ・フレンチの評価を繰り返した。『オブザーバー』の，ロナルド・ブライドンはロイヤル・コート劇場でのロレンスの戯曲の季節を「ノティンガム州の村での幼年時代，結婚，死の 3 篇の戯曲」を合わせて，「イングランドの労働者階級の生活の一つのパノラマ」を作り上げた「すばらしい企画」と見なした。ブライドンは，「一篇の戯曲としては，おそらく，それらの戯曲のどれも傑作というわけではないが……しかし，別々にしても，それらの戯曲には劇場で普通に通用する真実と純粋さがあり……それらの戯曲は通俗的なように思われるが，合わせると，それらの戯曲はすばらしいものになる」のを，認めている。『プレイズ・アンド・プレイアーズ』のベネディクト・ナイティンゲイルもまたそれらの戯曲の並々ならぬ感情の正直さを次のように強調している。

> 20 世紀初期の私たちの演劇のほかのどこに，舞台で個人的関係を知的に取り扱おうとするロレンスの戯曲に匹敵できる試みを見いだせるか？ショーにか？ふざけすぎて，ペラペラよくしゃべって冷笑的すぎる。それじゃ，ゴールジワージーか？薄っぺらで，ありきたりだ。説教的でもある。ロレンスは先入観を持った意味などを彼の戯曲に押し付けようとはしない。それどころか，ロレンスの戯曲はあの使い古された形容詞の，exploratory（訳者注：探検の，探査の，探求的な）という語の意味を最大限に活用している。ロレンスの全精力は，彼の観客の喜びのためと同じように彼自身の心の安らぎのために（そう感じられるのである），人間の争いを観察し，それを理解し，それを説明しようとするのに注がれる。[247]

『炭坑夫の金曜日の夜』についての劇評家たちの論評では，その戯曲の自然主義に注意が集中されている。詳細に入念に再現しても全然演劇の代用にはならないと思う劇評家もいた。例えば，『デイリー・テレグラフ』のエリック・ショーターは，「『コロネイション ストリート』（テレビの連続メロドラマ）は言うまでもなく，映画や台所調の劇（訳者注：主に 1950 年代から 60 年代にかけて，労働者の家庭生活を極端なまでリアルに描いたイギリスのリアリズムの戯曲）によって，私たちはギル氏が喜ぶのは明らかな写真のようなリアリズムの魅力に慣れてきた。ギル氏はその魅力についてあれこれじっくり考えてきわどい考え方をする。そして，演劇的に言うと，作家自身があれこれじっくり考えるので，上演時間の 2 時間は非常にのろのろと過ぎていくのである」と，述べている。しかしながら，ショーターが批判したまさにそのことを賞賛する劇評家もいた。例えば，『タイムズ』のアーヴィング・ウォードルは，いかにして「人は食べたり，体を洗ったり，洗濯したり，雑談をしたり，給料を分け合ったりする日々のやりとりのもとで，複雑な家族の絆に気づかされるのか……人は自然主義がどのようなものであるべきかに，すなわち，普通の生活について真実を語ることによって注意を集中させるわざ（術）であるということに〔その演技によって再び気づくようになる〕」と，書いている。[248] 1968 年の『嫁』については，賛成したものはもっと多かった。『タイムズ』のマイケル・ビリングトンは『嫁』を「面白い方言，控えめのユーモア，激しい感情的衝突がいっぱいあり，説得力のある，抑制のきいた作品」と称している。ビリングトンはギルの演出が「普通の家庭生活の詳細に忠実であるの」を賞賛して，「ロレンスは劇作家としての最も基

本的な能力である，2人の別々の，対照的な個人の心と頭の中に同時に身を置いて考える能力を確かに持っていた。」と主張している。[249]

しかし，最も賞賛を得たのは『ホルロイド夫人やもめになる』の上演であった。とりわけ，劇評家（と観客）は，ホルロイド夫人と彼女の義母がその戯曲の終わりでホルロイドの死体を洗っている時，ホルロイド夫人を演じる女優のジューディ・パーフィットがその死体の上に身をかがめて泣いている光景に魅了された。観客は感情の衝突の複雑な様相よりもこのような劇的な感情のリアリズムに満足した。『ホルロイド夫人やもめになる』はそのすぐれた―他の戯曲より伝統的なしきたりに従ったものであるが―構成においても賞賛された。[250] 劇評家たちは，自然主義に多少疑いを抱いているにもかかわらず，全体としてロイヤル・コート劇場でのロレンスの戯曲の季節に対する反応は言いようがないほど好意的であった。ギルの仕事があとに残した主要なものは，英国と外国のアマチュア及びプロの劇団の標準的なレパートリーのためにこれらの3篇の戯曲を回復したことであった。[251]

1968-95.『一触即発』,『回転木馬』の上演，ロレンスの戯曲が劇場及びテレビのレパートリーの一部となること

ロンドンでのギルのロレンスの戯曲の季節のあと，「上演が国中で急速に増えた」。[252] 例えば，『嫁』は1968年にもう3回，リンカーンとハロゲットとノッティンガムで上演された。一方，『ホルロイド夫人やもめになる』は，アーヴィン･ブラウンがニュー･ヘーヴンで上演した1973年にアメリカ合衆国で再発見された（これが『ホルロイド夫人やもめになる』のアメリカでの初演だと思われたのは，間違ってはいるが，無理もないことであった）。[253] スタンリー・カウフマンは『ホルロイド夫人やもめになる』の特質が希薄であり，劇の筋の展開が不明確であることを遺憾に思ったが，ダイアローグは「ロレンス特有のあるがままの耳ざわりなものだが，力がこもっていて」，すばらしいと思った。『ホルロイド夫人やもめになる』はカウフマンには「ロレンスが英国の労働者階級の一流の重要な小説家であるように，労働者階級の一流の重要な劇作家であることも」証明したのである。[254] ロレンスを劇作家として復活させるのに非常に重要であったのは，演劇界で突破口を開いたロレンスの戯曲を1968年と1969年に廉価版で再出版したことであった。マイケル・マーランドは1968年に『ホルロイド夫人やもめになる』と『嫁』を1冊にした一つの版を出版し，その序文で劇作家としてのロレンスについて初めて知的な考察をした。マーランドは有益な方言用語集も提供してくれた。『タイムズ文芸サプリメント』のアンドー･ゴムはマーランド版の出現を歓迎して,『嫁』は「ロレンスの断然最優秀の」戯曲で,「『息子たちと恋人たち』やノッティンガム州を題材にした最もすぐれた短編小説だけでなく，この戯曲も知っておくべきである」，と主張した。[255] 1969年のペンギン版（『3篇の戯曲』という題名で，この題名は1968年のギルの上演からヒントを得ている）はレイモンド・ウィリアムズの有益な情報を与えてくれる序文と共に，『炭坑夫の金曜日の夜』を付け加えている。ウィリアムズの序文はロレンスがその枠内で戯曲を書いた特定の種類の自然主義に注意を集中している。これらの2つの版は学校やアマチュア及びプロの劇団で広く使用されて，絶えず増え続けているロレンスの戯曲の読者はその2つの版によってロレンスの戯曲を知るようになったのである。

しかしながら，いくつかのロレンスの戯曲は依然として上演されるのを待っている状態にあった。「炭坑を題材にした」ロレンスの初期の戯曲に関心があったとすれば，『一触即発』がこんなに長い間上演されるのを待たなければならなかったのはおそらく意外であった。1973年になってようやく，プロ並みの水準のアマチュアのグループであるクエスターズ（Questors）がロンドン郊外のイーリングの，自分たちの円形劇場で『一触即発』を上演した。『一触即発』の最初のプロによる上演はオックスフォード・プレイハウス（Oxford Playhouse）で1979年11月に初めてであった（そのあとロンドンのロイヤル・コート劇場でただ1回の上演が行われた）。しかしながら，どちらの上演もあまり受けはよくなかった。1973年の上演は，演出家のピーター・フウィーランが特別な歌を付け加えたが,「筋の運びが遅く, 単調だ」と思われた。イーリングの地方紙の「退屈な演劇で最高の演技」という見出しは，その評判を一口で評している。だが，その地方紙は最後の「場（ば）」―その「場（ば）」を劇評家たちは以前1920年に舞台で成功するだろうと主張していたのだが―を選び出して，それは「それ以外は退屈な物語であるのに対して感動的な結末」であると付け加えている。[256] ロレンスと劇評家たちとの蜜月時代は終わった。アラダイス・ニコルが，1973年に，「恐らく，『炭坑夫の金曜日の夜』をのぞけば

……それらに彼の〔ロレンスの〕名前が付いていなければ，それらは人に知られていないほこりをかぶった場所から見つけ出されることは決してなかったように思われる」と述べた時，ニコルはもう少数派ではなかったのである。[257] それは1960年代の半ばには観客，批評家，劇場支配人の経験したことではなかった。1979年に行われた『一触即発』の新たな上演は，間違ってその戯曲の初演だと広告されたが，[258] 概して酷評された。「その名に値する特徴がない……話があちこちに飛ぶ陳腐な筋の運びについては，これはばかばかしいことがしばしばである」と，『フィナンシャル・タイムズ』のギャリー・オコナーは言い，一方ジョン・バーバーは『デイリー・テレグラフ』で「その戯曲は……一部で居間の単調な話しぶりから突然急にラブシーンになる……実際，全体としては，その戯曲はめちゃくちゃだ」と述べている。しかしながら，『ガーディアン』のニコラス・ドゥ・ジョンフはそれが「欠点のある戯曲」であることを認めながら，「その欠点の中に何と報いるものがあるのだ」と感嘆の声を上げている。[259]

おそらく1970年代の最も興味ある初演は『回転木馬』の初演だろう。『回転木馬』は1973年にも，ロイヤル・コート劇場で11月7日にギルによって上演された。[260] この時には，ギルは『回転木馬』を短縮し，脚色したのであるが，それはギルがそれ以外の彼の演出では原文の正確な語にこだわっていたので，断固としてしようとしなかったことである。例えば，ギルは第一幕の舞台の上でのガチョウを取り除き，ポーランド人の教区牧師とその妻の役割を変更したりした。『回転木馬』の最初の四分の三の感情的リアリズムと劇的緊張は―再び，ギルと彼の一座によって心をこめて書き直され，その一座には1968年のロイヤル・コート劇場でのロレンスの戯曲の季節のベテランの女優であるアン・ダイスンが（ヘムストック夫人として）含まれていたが―3組のカップルが結婚することに同意する，唐突で，パロディー的な『お気に召すまま』（訳者注：シェイクスピアの喜劇）のような結末で突然一掃されるので，それでもなお，『回転木馬』の構成は人を驚かした。これを単に演劇上の工夫だと見なす劇評家もいた―『タイムズ』のアーヴィング・ウォードルはその「現実感」を「全体に関わるもので，ついには笑劇風の車輪が最後に加速し始めるのだ」と言っている。しかし，それを基本的な欠点だとする劇評家もいた。『ニュー・ステイツマン』のベネディクト・ナイティンゲイルは，「悲劇だと思われているものがシャフツベリーアヴェニュー（訳者注：ロンドン中央部ウェストエンドの劇場街）から舞い込んでくる一編のロマンチックなつまらないものになる」ので，「もっともロレンスらしくない，得意げな気取った笑いと肩をすくめること」に苦情を言っている。一方『プレイズ・アンド・プレイアーズ』のラッセル・デイヴィスは最後の5分間の面白い温厚さを次のようなことで批判している。

> 前の2時間とは受け入れがたい対照をなしていて……舞台いっぱいの気難しい思いにふける人たちは，とてつもない賃上げによってか，素早く飲んだ数パイントのブラック・アンド・タン（訳者注：エールで割った黒ビール）によって発作的に一群の無骨者になったかのように，またたくまに変質する。演劇の最大の魅力の一つは，道徳問題が審理される時私たちも傍聴席に加えるということなのである。『回転木馬』は突然示談で解決するが，卑劣なことである。[261]

それでもなお，方言の話し言葉に反対する劇評家がいた。しかしながら，『回転木馬』とその「この上ない活力」を支持する声が少なくとも一つは上げられた。『ガーディアン』のマイケル・ビリングトンは「ロイヤル・コート劇場がD.H. ロレンスの戯曲に深くかかわれば関わるほど，英国の演劇界は宝の山を持ち続けていることがますます明白になる。20世紀初期のロレンス以外の生え抜きの英国人の劇作家で個人的関係をこんなに知的に扱ったものは誰もいないし，英国の地方の生活をこんなに生き生きと描いた劇作家もほとんどいない。」と述べている。[262] しかし，それは―1979年の『一触即発』のプロの劇団による上演を別にすれば―ロレンスの新しい戯曲の上演の終わりであった。『回転木馬』は再び上演されることはなく，『バーバラ争奪戦』は1967年以来一度だけ上演されたらしいが，（省略しないで形で上演されることは決してなかった）。[263] 一方『既婚者』が上演されることは非常にまれであった。[264]

演出家と，俳優と，観客が『ダビデ』に対してした苦労を思い出して，ロレンスは「舞台の実際のテクニックは僕にはなじみがないのです」（『書簡集』 vi. 204）とかつて述べているが，しかしながら，劇場についてのロレンスの経験不足は，特に1909年から1913年の間に創作された作品では，想像されたよりもはるかに問題にはならなかった。ウォルター・グリーンウッドが1936年に『嫁』を『私の息子は私の息子』と修正

した時，変更する必要をほとんど感じなかったのは注目すべきことである―グリーンウッドは実際，筋に混乱があると見なしたところを片付け，もっと劇的なクライマックスを創りたいだけだったのである。1970 年代から 1990 年代の演劇界でロレンスを代表するのは『炭坑夫の金曜日の夜』，『ホルロイド夫人やもめになる』，『嫁』の定期的な再上演であり，これらの戯曲はラジオやテレビの標準的なレパートリーにもなっている。[265] そのことは，波乱にとんだ経歴を持つ戯曲にとっても，ロレンスにとっても，注目すべき結果である。何故なら，ロレンスは度々演劇を見に行き，非常にたくさんの戯曲を読んだけれども，演出者をほとんど知らず，俳優たちと仕事したことも一度もなく，楽屋へ行ったことも決してなく，自分自身の戯曲が上演されるのを見たことも一度もなかったのだから。ロレンスの作品の多くが常に，本質的に戯曲であったということはクリティカル・ポイント（訳者注：物事が限界に達する段階）の真実性を裏付けている。

テキスト

『炭坑夫の金曜日の夜』

ロレンスはクロイドンで教鞭をとりながら，1909 年の秋, 現存する原稿（以後 MS と表記）[266] を書いた。1909 年 11 月 27 日までに書き終えられた。134 頁の MS は黒のインクで書かれた。削除，訂正，他の語句との置換はほとんどなく，軽微な修正があるだけであった。8 頁と 12 頁の綴じられてない冊子（刷り本）からなり，半分片側に文字が書かれている。ページは書かれていないが，ロレンスはローマ数字を冊子につけている。各ページには 21 行の罫線があり，‘Boots/CASH STAIONERS’ の透かし模様がある。1907 から 1911 年までの日付の他の原稿と同じような紙を使用した。

MS は 1933 年 5 月にタイプされた（TCCI）。[267] そのタイピストはかなり正確であったが，句読点は規則化され，2, 3 行の省略があり，語の書き換え，間違った解釈が多々ある。1934 年 2 月さらに複写され，それのカーボンコピーが現存している（TCCII）[268] が，そのコピーは TCCI によって表されたテキストの状態から用意された。TCCII は句読点や方言がかなりいじくられたので，その劇は広範囲に標準化されてしまった。この状態のテキストが 1934 年に Secker によって最初の英語版の定本（EI）として使用され，その時さらに植字工によってかってにいじくられて，印刷屋独自のやり方がテキストの性格を変えてしまった。EI が『戯曲全集』のテキストのもとになった。[269] いくつかの軽微なテキストの変更（例えば，ト書きと句読点の修正）は『戯曲全集』のすべての戯曲に行われた。

MS が底本として採用された。TCCI, TCCII, EI はテキストとしての権威はない。しかし戯曲が印刷された舞台の記録として，それらの中の異形はテキスト参考資料に収録されている。

『ホルロイド夫人やもめになる』

ロレンスは 1909-10 年の期間にこの戯曲を思いついた。原稿は 1910 年 11 月 9 日までに書かれた。1913 年のはじめに Garnett が原稿をタイプさせて Mitchell Kennerley にテキストを送った。Kennerley は出版を申し出た。ロレンスの知らないうちに，アメリカで植字が始まった。ロレンスは 8 月に修正した。その修正版は 9 月にアメリカに届いて，テキストに組み入れられたことはほぼ間違いない。ロレンスは Kennerley によって作られたきれいなタイプ原稿を含む修正版を 10 月に見て，11 月にさらに修正し，彼に戻したのかもしれない。Kennerley が 1914 年に出版したテキスト（AI）[270] に 8 月，10 月，11 月にされた修正，変更のどれが，どれくらい最終的に組み入れられたかは正確には分からない。最初の手書き原稿もタイプ原稿も校正刷りも残っていない。1914 年に Duckworth によって出版された最初の英語版（EI）は Kennerley に与えた用紙を使用し, AI と同じテキストである。EI が『戯曲集』（*Plays*）と『戯曲全集』（*Complete Plays*）の原典であった。[271]

底本は AI である。最小限の変更で再刊されたが，印刷された頁のレイアウトやタイポグラフィーは彼の本で守られてきた一般的慣習に従って，標準化されている（「この版のテキスト印刷のための慣例」pp. cxxv-cxxvi 参照）。この戯曲のテキスト参考資料はない。

『回転木馬』

ロレンスは母親が不治の病にかかった 1910 年 11 月下旬と 12 月初めに三番目の戯曲を書き始めた。1911 年初めにおそらく書き終えられた。最初の原稿（MS）[272] は 152 頁からなり，インクで書かれた。ほとんど削除，訂正，書き換えはなく，2 ヶ所だけ行間に書

き込みの修正がかなりある。13 の綴じられていない冊子からなり，それぞれは折りたたまれた 5, 6 枚の紙からなり，ロレンスの手書きでローマ数字が書かれている。紙は『炭坑夫の金曜日の夜』に使われたものと同じものである。頁は 1〜148 頁までアラビア数字でロレンスが書いているが，4 か所数字が重なっている。

MS は 1933 年と 1934 年にロンドンでタイプされた。リボンコピーと二つのカーボンコピーが現存しているが，[273] おそらくは 1934 年にタイプによるものである。それらは同一の特徴を持っている。しかしこれらのタイプ原稿はテキストの伝達には影響しなかった。

MS は Frieda Lawrence が保管していて，ニューメキシコに移動した。1939-40 年の冬にタオスでコピーされ，そのリボンコピー（TSI）と一つのカーボンコピーが現存している。[274] コピーが Charlottesville の *Virginia Quarterly Review* の編集者に送られて，彼が 1 行 1 行，1 頁 1 頁を正確に再びタイプし直し，その雑誌での出版の定本として新しいタイプ原稿を作成した。修正され，書き記されたリボンコピー（TSII）[275] と修正されていないカーボンコピー[276] は——2 頁のリボンコピーが含まれているが——現存している。この戯曲はその雑誌のクリスマス号 vol. xviii（Per）の補遺（pp. 1-44）として 1940-1 年の冬に出版された。「1940 年私的に印刷された」抜き刷りも印圧のよりかかった紙で，異なった標題をつけて存在している。

アメリカ人のコピーイスト，編集者，植字工がおびただしくロレンスのテキストを変え，誤った解釈をした。彼の多様な句読点，方言がかなり変更された。Per が『戯曲全集』（EI）の最初の英語版の準備の段階で使用された。[277]

MS が底本として採用された。TSI, TSII, Per, EI にはテキストとしての権威はない。異形文・語はテキスト参考資料に収録されている。

『既婚者』

ロレンスは 1912 年 4 月に最初の原稿（MS）を書いた。[278] 4 月 23 日までに書かれた。MS の 67 頁は黒インクで書かれたが，初めの 5 頁は紛失している。MS の現存している最初の頁はロレンスの手書きによって 6 頁となっている。MS が 1933 年にロンドンでタイプされる前にこれらの頁は分離し，紛失していた。頁付けはアラビア数字で 6-72 である。MS には行間の修正や訂正はほとんどない。現存する最初の頁にはさらに鉛筆で「？既婚者」と記されていて，おそらく 1939-40 年に追記されたのであろう。テキストは微かに半透明の 1 頁 26 行の罫線入りの用紙の片側に書かれていて（24 頁と 36 頁は罫線がない），見たところ上が糊付けされた便箋からはぎとられたようである。

MS は 1933 年 6 月にロンドンでタイプされ（リボンコピーが残っている）[279] 1934 年に再びタイプされた（リボンコピーとカーボンコピーが残っている）。[280] しかしこれらのタイプ原稿はテキストの伝達には影響しなかった。

MS は Frieda の手元にあり，ニューメキシコに移動した。1939-40 年の冬にタオスでタイプされ，リボンコピー（TSI）と一つのカーボンコピーが現存している。[281] 一部のコピーが *Virginia Quarterly Review* に送られ，再度タイプされて『回転木馬』と同じやり方で印をつけられた。リボンコピーとカーボンコピーが混じった頁の，修正され印をつけたコピー（TSII）[282] と，そしてリボンコピーとカーボンコピーが混じった無修正のコピー[283] が残っている。

この劇は 1940 年に *Virginia Quarterly Review*（XVI, 523-47）に掲載され，出版された（Per）。Charlottesville のコピーイスト，編集者，植字工は時々ロレンスのテキストを変えたり誤解して，広範囲に句読点を勝手に変えた。Per が『戯曲全集』の最初のイギリス版（EI）の準備に使用された。[284]

MS が底本として採用された。TSI, TSII, Per, EI にはテキストとしての権威はない。それらの異文（variants）はテキスト参考資料に収録されている。

『バーバラ争奪戦』

ロレンスは 1912 年 10 月 28 日から 30 日の間に，現存する 56 頁の原稿（MS）[285] を書いた。「いわば Paul Morel の幕あい（interlude）としての劇」（i. 466）というロレンスの言葉は，MS の用紙が『息子と恋人』の原稿の最後の頁の用紙と，そして 1912 年 10 月 30 日と 11 月 14 日に書いた手紙で使用された用紙と同一のものであることから裏付けられる。[286] MS は罫線の入った折り（gatherings）（6-leaf, 8-leaf, 10-leaf の折り）の片側と，おそらくは折りから引きはがされた綴じられていない紙に黒いインクで書かれた。頁付けは 1 から 55 頁になっていて，「28」の頁が 2 つある（2 番目のものはロレンスが折りを新しくしたときに生まれた）。ロレンスが対話の部分を書きかえている MS で，4 回広範囲の行間の修正が行われている。ドイツ語と英語での鉛筆の書き込みが 4 箇所あり，その中の二つ

はFrieda Lawrenceの筆跡であることは確かである。ロレンスは書き終えるとすぐにEdward GarnettにMSを送った。1913年2月にガーネットから返却されてから，再びそれに取り組んだかどうかは分からない。

MSは1933年にタイプされた。イギリスの文芸雑誌，the *Argosy*に1933年6月に「連載権」をロレンスの代理人たちは売り渡し，出版者のMartin Seckerに次の出版を任せた。1933年12月その雑誌は短縮され（ほとんど四分の一にカットされた），広範囲に出版社独自の様式に変えられた劇を*Keeping Barbara*というタイトルでpp. 68-90に公表した（Per）。代理人たちは異なった題名で公表されたことに驚きを表明した。削除についても当然同意されていなかったものと思われる。完全なMSと思われる，1933年作成のタイプ原稿のコピーで，現存しているものはない。二つの現存するタイプ原稿[287]は，短縮され，Perの出版された出版社独自の様式の劇を再現しているが，Perの句読点のほうがMSに近い。Perの植字工たちが1933年MSから作成し，もはや存在しないタイプ原稿を使用したことはあり得る。それは印を付けられた削除や変更（ほとんどおそらくその雑誌の編集者たちによってなされた）を含むが，その句読点はMSに近いままであった。そのような印の付いたタイプ原稿が句読点を勝手にいじった，現存する初期のタイプ原稿の原典そのものであった。MSは1939-40年の冬の間に再びタイプされた。フリーダがおそらくその時，劇の最初の部分を手書きで写し取った。[288]

Perの出版された不完全な版が『戯曲全集』（EI）に使用され，[289]劇の名前も元に戻った。『バーバラ争奪戦』の現在の版は，初めて完全な原文を出版したものである。

MSが底本として採用された。PerもEIもテキストとしての権威はない。それらの異文はテキスト参考資料に収録されている。

『嫁』

ロレンスはおそらく原稿（MS）[290]を1913年1月の初めの12日間で書いた。大きなイタリア製の用紙に63の頁数が黒インクで記されている。1月半ばに彼はエドワード・ガーネットに郵送してから，再びそれを目にすることはおそらくなかった。1933年の秋までにMSはCurtis Brown社に所有されていて，タイプ原稿が作成された。現存する1例には――カーボンコピー（TCCI）[291]であるが――表紙にカーティス・ブラウンのニューヨーク支社のスタンプが押されている。Walter Greenwoodが（新しいタイプ原稿を作って[292]）1936年に*My Son's My Son*として改作してから，『嫁』は30年近く姿を消した。ある段階で――おそらくは『戯曲全集』（EI）の出版計画が1960年代初めに作成されていた時――TCCIはMSに関係なく，再びタイプされた。そのタイプされたものが単一のリボンコピー（TSII）で残っている。[293]ロレンスの劇で最も印刷されそうになかったものが初めて1965年に初めてEIであらわれた。[294]EIのテキストはTSIIであらわされたテキストの状態から，おそらくはカーボンコピーから取られた。EIのテキストはこのように二人の異なったタイピストの影響だけでなく，出版社の標準化の意図にも従っていた。そのタイピストの一人――TCCIのタイピスト――はロレンスが劇に使用した英国ミッドランドの方言を理解するのが難しかった。

MSが底本として採用されている。TCCI, TSII, Eはテキストとしての権威はない。それらの異文は劇が印刷されるまでの段階を記録しているものとして，テキストの比較資料に収録されている。Greenwoodのタイプ原稿は校合されていない。

『一触即発』

ロレンスは『一触即発』の原稿（MS）[295]をおそらく1918年10月22日～28日の間に黒と青のインクで書いた。それは70頁からなり頁の番号が不正確であった。（表紙は頁数がなく裏に登場人物表が書かれていた。）この劇は1918年の冬かあるいは1919年の春のいずれかにJ.P. Pinkerのオフィスで最初にMSからタイプされた。リボンコピーのタイプ原稿は一つしか作られなかった。2つコピーが作られたと断言するロレンスの手紙についてのPinkerのオフィスで作られた注釈には「一つである」（iii. 396 n. 3）と書いてある。1919年9月に――劇場の経営者の手にそのタイプ原稿があったので――Pinkerはもう一つのコピーを用意できなかった。原稿は現存していないため，ロレンスがPinkerのタイプ原稿を修正したかどうかは分からない。おそらく1919年6月のある段階で，ロレンスは鉛筆でMSを修正した。彼の修正のいくつかは読みにくい語を読みやすくしただけであった。さらに場の初めの舞台指示に下線するなどしており，タイプ用のMSを準備していたのかもしれない。MSは1919年夏に劇場代理人Walter Peacockによって1つのリボンコ

ピーと2つのカーボンコピーで再度タイプされた。「2番目のカーボン」（TCC）と記された未修正のカーボンコピーは現存していて，[296] この劇の出版者，C.W. Danielの組版原稿となり，Neill印刷会社の植字工によるとの印がある。ロレンスがそれを目にしなかったことはほとんど確かである。彼がそれを変更することはありえなかった。この劇の最初の英国版（E1）がDanielによって1920年5月に出版される前に，ロレンスが「the MS」と呼んでいたテキストをCompton Mackenzieに送っていた（iii. 510）。これがMS，すなわちPinkerのタイプかPeacockのタイプ原稿[297]の一つだったのかもしれない。しかしこのテキストはDanielの出版には影響しなかった。MSは多分Pinkerのもとに所有保管され，TCCの組版コピーは最初はDanielの所有に，それからおそらくPinkerのもとに残された。アメリカ版はDanielによって供給された刷り本から出版され，色つきのクロース装であった。「おもしろそうに見える」とロレンスは言った（iii. 565）。この劇は『戯曲集』にE1から再販され，そのテキストが『戯曲全集』のもととなっている。[298]

MSは『戯曲全集』の底本として採用されている。TCCでPeacockのタイピストによってなされた変更は直接MSから作業しているが，権威がない。ロレンスはTCCを修正しなかったし，校正を見るということはありそうにない。E1での変更の一つ（一つの歌の別の歌による置き換え）だけが明らかな著者の権威を有していて，Danielにおそらく別々に送られたのであろう。[299] さらに印刷されたテキストの10箇所（387：26, 388：33-4, 396：6, 401：34, 402：28, 403：16, 407：9, 421：29, 422：2）で，実質的な変更が行われた。校正でのロレンスの責任は考えられるが，88頁の中の11の変更を彼の責任に限定することは無理かもしれない。[300] その変更の8箇所は単語への変更であり，ほとんどがテキストを平易なものするためであり，そのどれも特に他の変更とは似ていない。――それに反してロレンスの修正の特徴は，変更の時と同様に再考や改作の時には語句の同じような種類の変更を行った。426：40における変更のみがこの版では採用された。TCCとE1の異形はテキストの比較資料に記録されている。

『一触即発』の序文

ロレンスは1919年6月に序文を書いた。21行の罫線のある9枚の薄紙に書かれた原稿（MS）[301] はタイプされなかったが，この劇（E1）の初版の印刷社である，エディンバラのNeil社によって組版原稿として使用された。[302] 植字工の名前が鉛筆で2頁目にGallagherと，5頁目にBradyと書かれている。MSは恐らくPinkerが所有して残った。ロレンスがE1の校正を見たということはありそうもない〈上記参照〉。序文はE1から『戯曲集』の中で再販された。[303] ハイネマンの『戯曲全集』から序文は省略されたが，1968年『不死鳥II』に現れた。[304]

MSが底本として採用されている。E1と編集者による二つの修正箇所（364：14, 365：20）はテキストの比較資料に記録されている。

『高所』

ロレンスはこの劇（恐らく現在紛失している初稿）を1924年6月19～23日頃書き，28頁のノートに（MS）に書き記した。[305] Spud Johnsonが1938年に*Laughing Horse*（Per）に第1場を印刷したとき，やや素人的だがかなり正確なリボンコピーの，MS全体のタイプ原稿（TS）[306] を使用した。それは書籍販売人であり収集家のJake Zeitlinによって供給されたものだった。Zeitlinは1937年にTSを作らせていた（リボンと少なくても1つのカーボンコピーで）。一方その当時Frieda Lawrenceが持っていたMSはロサンゼルスで展示されていた。[307] Johnsonは自分が望ましいと思うように変更や改良を加えてTSの第1場を修正した（TSC）。彼はいくつかの舞台指示を書き直して，最後の部分を完全に削除した。彼はロレンスが「第1場を書き終え，第2場を書き始めた」（Per III）ことに言及したが，第2場は印刷しなかった。というのはそれが断片にすぎないし，第1場より面白くないと多分思ったからだ。TSCのタイプミスの疑問符が付けられた彼の校訂は拠りどころとすべきMSを彼は持っていなかったことを示している。

雑誌の校正の段階で改定は続けられ，第1場に多数の変更，修正がなされた。JohnsonはまたPerに登場人物の表を付け，それぞれに解説を加えた。Zeitlinのタイプ原稿の現存しているカーボンコピーは訂正されず，TSのテキストと同じであり，校合には含まれてない。[308] MSはまた別の機会に1930年代に多分Curtis Brown社のためにタイプされ，このタイプ原稿の2つのカーボンコピーが残っている。[309] それはテキストの伝達に寄与しなかったので，校合には含まれていない。『戯曲全集』（E1）[310] は第1場の底本として，

Perを使い，第2場は，初めての印刷であったがZeitlinのタイプ原稿が使用された。[311] MSは考慮されなかった。第2幕のはじまりの舞台指示は修正され，3つのせりふが省略された（おそらく事故によって）。

この版はロレンスのMSを底本として採用，従ってJohnsonの手が加えられていない第1場のはじめてのロレンスの版の印刷となる。第2場は失われていたせりふが戻されている。比較資料にはTS, TSC, Per, E1の異形が記されており，劇の上演のために提案された舞台指示の修正はテキストに従っている。

『ノアの洪水』

2つの原稿の断片（MSI, MSII）が現存している。MSIは1925年初めにロレンスが書いた11頁の原稿であり，[312] MSIIは1926年から1927年の間のある時期にノートに（書き換えながら）書き写し始めた10頁のテキストである。[313] MSIIのテキストはMSIよりずっと断片的で，MSIにはある後半部分が欠けている。MSIは後半部分があるため唯一の権威をもつ。

MSIIは新しいノートに書きはじめられたが，MSIの改訂版であり新しいテキストではない。MSIIはMSIの前半部分を修正するために使用された。MSIIのテキストは3つの同じカーボンコピー（TCC）に現存している同じタイプコピーから*Phoenix*（AI）に[314]印刷された。[315]『戯曲全集』のテキストはAIからとられた。19行は別として，MSIが印刷されたことはなかった。[316] MSIはMSIIから修正されて，底本として採用されている。テキストは，異形が比較資料に記録されているTCCとAIのテキストと校合されている。劇の上演のための舞台指示の示された修正はテキストに従っている。

『ダビデ』

原稿（MS）は1925年3月下旬から5月7日の間に初めは172頁のノートに鉛筆で書かれた。[317] インクでの修正がいくつかある（例えばpp. 164, 167-8）。MSは1925年5月から6月の間にDorothy Brettによりタイプされた。このタイプ原稿は初めリボンコピー（TS）[318]とカーボンコピーが存在してたが，今は紛失している。TSはBrettのいくつかのタイプ原稿より良いけれど，不正確で不明瞭である。カーボンコピーはたくさんの二重打ちのため特に読みにくかったにちがいない。Brettはまた時々句読点を抜かしたり，語句を省いたり加えたりした。時には行全体やせりふを省いた。さらに彼女はタイプライターの余白設定によってそれ以上タイプできない頁の右端に単語を不完全なままにしておいた。彼女か，あるいはロレンスがTSの見えなくなっている文字をきちんとインクで記入し，カーボンコピーもほぼそのようになっている。

ロレンスはTSとカーボンコピーを見直して，訂正，変更，追加を行い，TSRを作ったが，MSとBrettが作ったものとをどの段階でも比較しなかったようだ。いつものように彼はTSとカーボンコピーを少し異なるように修正した。作品を発展させる目で彼はそれらを読み，最も明白な間違いを訂正しただけであった。しかし，Brettのタイプミスに対して彼がした変更によってMSの読みには編集上戻れない段階にまで彼のテキストがときおり発展した。また彼はBrettがした間違いをできるだけ直したこともあり，MSの読みに戻るほうがより重要である。どちらにするかの編集上の決定は注釈で論じてある。

Seckerはカーボンコピーを最初の校正刷りの組版コピーとして使った。そのうちのほとんど無修正の一組（PPI）が現存している。[319] ロレンスは1925-6年の冬にその校正刷りを訂正したが，その時，どうやらMS, TSあるいは組版コピーを見ることはなかったようだ。たとえ印刷業者が組版コピーを送っていても，ロレンスはそれを考慮したようには見えない。明らかにロレンスに起因するTSとPPIとのかなり多数の相違は，しかしながら組版コピーのたくさんの異文を保持している。[320]

PPIとPPIIと最初の英国版（EI）を比較することで，校正におけるロレンスの性質，連続性を研究することができる。PPIにおいて，彼は「神」や「主」への言及を，前述したように宇宙やアニミストの代用名を作ることで，大胆に減らした。さらにすべての言葉の修正を行い，小さな細部の訂正においても驚くほど慎重であった。PPIIで2つの言葉の変更をしただけに見えるが，句読点の調整と大文字化を続けた。[321] しかし印刷業者たちはあらゆる段階でロレンスのテキストを標準化した。現存するタイプ原稿とPPIを比較することで，彼らが慣習上必要とされるところにコンマをきちんと入れ，いらないと思った句読点を省いたことが分かる。このやり方をPPIIでも彼らは続けた。[322] PPIでさらに分かるのは，最初の規格でイスラエルの神への言及では代名詞を大文字にする処理を始め（PPIIでその方法を最後まで行った），また残っている「主」や「神」を（旧約聖書の神に言及するとき

は）大文字にすることで矛盾のないようにした。[323] 彼らはまた2つの校正の段階で，特にPPIIをEIに変えるとき行の混乱を避けるために行替えをいくつか行った。さらにまた，印刷された頁の見映えをさらに良くするため，ト書きにカッコを付けるなどの多くの小さい修正を行った。[324]

完全に訂正された初稿はしばらくロレンスの手元にあったが，現存していない。ロレンスは1926年初め第2校を訂正した。又もやそれは現存していない。現存しているほとんど訂正なしの第2校（PPII）[325] はもともとは印刷業者のために作られた1枚を含んでおり，その中（PPIIR）の2箇所の著者による訂正は，ロレンスが英国版（EI）の訂正のいくつかに責任があることを示している。[326] Knopfのアメリカ版（AI）のテキストは全部EIから来ており，完全に訂正されたPPIIか，（おそらく）EIの新刊見本から取られた。[327] EIは『戯曲集』（*Plays*）の底本として使用され，『戯曲集』（*Complete Plays*）の底本となった。[328]

『ダビデ』の大部分の底本はMSである。組版原稿のタイプ原稿とTSに書かれた第4場（451：3-17）の終わりの底本は（その組版原稿がない）PPIである。TSは概して名詞と句読点のテキスト上の袋小路であり，紛失した組版原稿はEIとAIの出所であった。そしてその読み方のほうが（それがPPIのテキストと区別され復元できる場合）TSに残っているものよりも好まれてきた。

印刷された異なったPPIの名詞は――通常，組版原稿においては著者の校正を記録しているが――概ね採用されてきた。これがなされなかったケースについては，テキストの比較資料のなかで示され，注釈のなかで論じられている。PPIは時々EIが消してしまい今はない組版原稿の痕跡を保持している。例えば503：30に対するテキスト比較資料を参照。修正された初稿の中でロレンスが行ったにちがいない名詞の著者校正（PPIに掲載）と修正された第2校で行われた校正（EIに掲載。以下参照）もまた採用された。

PPIの植字工は神を表すロレンスの代名詞の標準化を開始した。これらの頭文字はMSとTSで小文字であったが，PPIはその多くを大文字の頭文字で印刷した。標準化は続けられ，PPIとPPIIの校正で完了した。PPIIの現存の副本の第2場（439：33）にロレンス自身が‘his’を‘His’に変えた唯一の例があるが，このことはテキストの植字工による最初の標準化に従うべき根拠とはこの版においては見なされていない。ロレンスはテキストの既成事実に応えようと（一致させようと）していた。ロレンスの‘thee’はすでに1行前の439：32で‘Thee’に変えられていた。

訂正が施された現存のPPIIは，しかしEIのどれだけの変更がロレンスによるものかについての推測の助けになっている。PPIIの13頁でロレンスは‘his’を‘His’に変えて，‘feardest’を‘fearest’に訂正した（439：15）。しかしEIにはほかに二つの変更がある。すなわちコンマの削除（439：31）と‘m’の大文字化（439：35）である。これはEIの変更の多くがエディンバラのリバーサイド出版社によるものであるという編集者の仮説を確証するものである。EIの138の変更箇所のうち大多数（89箇所）が標準化である。（スペリングの変更――例えば465：13で‘inquire’から‘enquire’へ――コンマとハイフンの追加と削除，ピリオドの感嘆符への変更など。）13箇所での大文字化と小文字化。10箇所での‘Oh’から‘O’への変更及びその逆。

語彙の変更が少ない，ささいなこの変更は他のロレンスの修正とは異なる。従って（468：8と471：28の）ロレンスに責任がある確かな証拠がある場合を除き，EIの変更は著者によらないものとして区別されるべきであると決定した。138箇所の変更の中で9箇所のみがロレンスによるものかもしれないし，2箇所のみがテキストの校訂箇所として認められた。

MSと初校（PPRI）の校正の句読点が，疑いなく又はほぼ間違いなく著者による句読点が組版原稿か（そのようにPPIに表されている）又は初校と再校の訂正原稿に書き入れられている場合を除きこの版に採用された。PPIの現存している異なった句読点が紛失した組版原稿の植字工による標準化によるものか，又はロレンス自身によって組版原稿に書き入れられた異なった句読点によるものか明確でない場合，TSRの句読点がより確実に著者によるものとして採用された。しかしながら校正のテキストにロレンスが最も多くの軽微な修正をしようとしていたことは両方の校正刷りから明らかなので，PPIとEIに初めて現れている新しい句読点の多くが採用された。

TS, TSR, PPI, PPIR, PPII, PPIIRとEIの異文はテキスト比較資料に記録されている。EIから直接来ているAIはこの校合には含まれていない。

原注

236）Nottingham County Librariesにあるプログラム。

237）1966年6月15日，19ページの‘Lawrence

Piece Shows Drama Grasp'.

238） 'The Dominant Sex', xiv (May 1967), 19.

239） Nottingham Playhouseでの上演（1970年3月4日）の演出家であるStuart BurgeはJessie Chamberの弟のJ.D. Chamberによって援助されたことを認めた（編集者所有のプログラム）。

240） 編集者所有のプログラム。それにもまたDHLのエッセイ 'Making Pictures' と彼の絵の5枚が転載されている。

241） 1967年7月7日，7ページ。

242） Sean Day-Lewis, 'D.H. Lawrence on Stage', 1967年8月5日，11ページの *Daily Telegraph*.

243） 1967年8月11日，7ページ。8月10日のさらなる劇評については，Herbert Kretzmer, *Daily Express*, p. 5 ; Milton Shulman, *Evening Standard*, p. 5 ; B.A. Young, *Financial Times*, p. 18. 1967年の他の劇評については，Helen Dawson, *Observer*, 13 August, p. 15 ; *Stage and Television Today*, 17 August, p. 17 ; V.S. Pritchett, *New Statesman*, 18 August, pp. 211-12 ; John Russell Taylor, *Plays and Players*, xv (October), 40-1 ; J.W. Lambert, *Drama,* no. 87 (Winter), 24 ; Ben Kimpel and T.C. Duncan Eaves, *D.H. Lawrence Review*, i (1968), 72-4も参照。Sager 305-7参照。

244） *A Collier's Friday Night* は2月29日に開演，*The Daughter-in-law* は3月7日に，*The Widowing of Mrs. Holroyd* は3月14日に開演した。それらは5月4日までレパートリーであった。Barry Hanson, 'Royal Court Diary, Rehearsal Logbook of the Three D.H. Lawrence Plays in Repertoire at the Royal Court till April 20', *Plays and Players*, xv (April 1968), 47, 52-3, 74参照。Sager 308-18に再版。

245） 編集者所有のプログラム。

246） Philip French, 'A Major Miner Dramatists', *New Statesman,* xv (22 March 1968), 390.

247） 'A Major Miner Dramatists', 390 ; 'Lawrence Triptych', 17 March 1968, p. 1 ; 'On the Coal Face', xv (May 1968), 18-21, 51. 1968年の他の劇評は次のようなものである。Irving Wardle, 'A Strindberg of Our Own', *The Times*, 2 March, p. 19 ; Herbert Kretzmer, *Daily Express*, 15 March, p. 5 ; Harold Hobson, *Sunday Times*, 17 March, p. 49 ; Simon Gray, *New Society*, xi (21 March), 423-4 ; Hilary Spurling, 'Old Folk at Home', *Spectator*, 22 March, pp. 378-9 ; Mollie Panter-Downes, *New Yorker*, xliv (11 May), 101-2 ; J.W. Lambert, *Drama*, lxxxix (Summer), 22-3 ; C.G. Sandulescu, 'Lawrence Dramaturg', *Contemporanul*, iv (4 October), 4 ; Chritian Moe, 'Playwright Lawrence Takes the Stage in London', *D.H. Lawrence Review*, ii (1969), 93-7, 及びKeith Sager, 'D.H. Lawrence : Dramatist', *D.H. Lawrence Review*, iv (19071), 154-82も参照。

248） 1968年3月1日，p. 19 ; 1968年3月1日，p. 12. さらなる劇評は次のようなものである。1968年3月1日に，Arthur Thirkell, *Daily Mirror*, p. 18 ; *Guardian*, p. 8 ; *Sun*, p. 4. 3月2日に，*Financial Times*, p. 14. 3月3日に，*Observer*, p. 31 ; *Sunday Telegraph*, p. 12. 3月9日に，J.C. Trewin, *Illustrated London News*, pp. 32-3.

249） 'Fine Way with a Lawrence Play', 1968年3月8日，p. 12. さらなる劇評は次のようなものである。1968年3月8日に，Arthur Thirkell, *Daily Mirror*, p. 20 ; *Daily Telegraph*, p. 19 ; Milton Shulman, *Evening Standard*, p. 4 ; B.A. Young, *Financial Times*, p. 38 ; *Sun*, p. 7 ; Philip Hope Wallace, *Guardian*, p. 8. 3月10日に，Ronald Bryden, *Observer*, p. 31 ; *Sunday Telegraph*, p. 14 ; Harold Hobson, *Sunday Times,* p. 50. 3月16日に，*Illustrated London News*, p. 32.

250） 1968年3月15日の劇評は，*Daily Telegraph*, p. 19 ; *Evening Standard*, p. 4 ; *Guardian*, p. 8 ; *The Times*, p. 13 ; *Sun*, p. 7. 3月17日に，*Observer*, p. 31 ; *Sunday Telegraph*, p. 14 ; *Sunday Times*, p. 49. 3月19日に，*Financial Times*, p. 26. 3月22日に，*Spectator*, ccxx, 378-9. 3月23日に，*Illustrated London News*, pp. 28-9. 精選された劇評はSager 307-22に再版されている。

251） *Daughter-in-Law* のRoyal Court劇場の上演は1968年の夏にヨーロッパ大陸で巡業された。

252） 1985年8月13日の *Daughter-in-Law* の上演の劇評の中の，Irving Wardle, *The Times*, 7ページ。

253） Lincoln, 1968年6月 ; Harrogate, 1968年7-8月 ; Nottingham, 1968年10月 ; Long Wharf Theater, New Haven, Connecticut, 1973年11月。

254） *New Republic*，1973年12月15日，22ページ。

255） 1969年3月6日，253ページ。

256） Questopics, no. 84，1973年9月 ; J.R., *Middlesex Country Times and West Middlesex Gazette*, Ealing edition, 1973年10月，15ページ。

257） *English Drama 1900-1930*，383ページ。

258） Nicholas de Jongh, *Guardian*, 8月18日，3ページ ; 11月10日，13ページ参照。

259） 11月8日, 23ページ ; 11月12日, 15ページ ; 11月10日，13ページ。

260） 1973年12月9日までのレパートリーに。Sager 324参照。

261） 1973年11月8日，12ページ ; lxxxvi（1973年11月16日），748-9 ; xxi (1974年1月), 50-1.

262） 1973年11月7, 8日，12ページ。1973年11月7日の *Guardian*，12ページのPeter Gillに関するHugh Hebertも参照。1973年のそれ以上の劇評は―11月8日に，*Daily Telegraph*, p. 14 ; *Financial Times*, p. 3 ; *The Times*, p. 13. 11月

11 日 に，*Observer*, p. 35 ; *Sunday Telegraph*, p. 18 ; *Sunday Times*, p. 37.　11 月 16 日 に，*New Statesman*, pp. 748-749.　11 月 17 日に，*Spectator*, pp. 646-7 ; *Drama*（Winter）, pp. 26-8.　数篇の劇評は Sager 324-6 に再版。

263）Nat Horne Theater, New York（1978 年 11 月 27 日）, David Macenulty 演出。読み合わせのリハーサルが 1973 年 3 月 2 日に Nottingham 大学英語学科で行われた。*David* の半ば公に催された上演（*Noah's Flood* の読み合わせがそれに先立って行われた）も 1974 年 2 月 28 日-3 月 2 日に，Nottingham 大学，New Theatre で開催された。（John McRae からの情報）。

264）9 回の上演が 1997 年 10 月 22 日から 31 日まで，Kennington Park の GBR Studio で，London の Royal Academy of Dramatic Art の学生によって行われた。その上演は Brigid Panet によって演出された。

265）Chronology 参照。*The Concise Oxford Companion to the Theatre*（1972）, *The Oxford Companion to the Theatre*（1983）及び *The Cambridge Guide to World Theatre*（Cambridge, 1888）の DHL に関する見出し項目も参照。Sylvia Sklar, *The Plays of D.H. Larence : A Biographical and Critical Study*（1975）も参照。

266）Roberts E74a（UT）.

267）Roberts E74b（UCB）.

268）From the Viking Press : no Roberts number（UT）.

269）［469］-530.

270）Roberts A5.

271）7-79 ; ［11］-61.

272）Roberts E237a（UCB）.

273）Roberts E237b（UCB）and E237c（UT）.

274）Roberts E237d（UCB）.

275）Roberts number なし（UV）.

276）Roberts E237e（UTul）.

277）［387］-467.

278）Roberts E229a（UCB）.

279）Roberts E229c（UT）.

280）Roberts E229b（UCB）; from the Viking press, no Roberts number（UT）.

281）Roberts E229d（UCB）.

282）Roberts number なし（UV）.

283）Roberts E229c.

284）［155］-201.

285）Roberts E130a（UT）.

286）Helen と故 Carl Baron による情報。書簡集 i. nos. 510, 513 と『息子と恋人』（1912 年 11 月 19 日完成）の原稿の最後の部分に使用された様々なサイズの 6 帖の紙。

287）Carbon copy Roberts E130c（UT）と carbon copy（the Viking Press より）with no Roberts number（UT）.

288）この原稿（Roberts E130b, UCB）はこの劇の伝達には役割を果たさなかった。それが *Virginia Quarterly Review* のために用意されたことはほぼ間違いない。この劇の最初の部分の原稿（Roberts E130d, UT）は Frieda の手元にある。彼女は 1939 年暮れ，MS がタイプされることが同意される前，*Virginia Quarterly Review* に MS を送ることについて心配していた時コピーを始めていたのかもしれない。（上記 p. xcvii 参照）この断片は第 4 頁の中央の文の半ばで終わっていて（現在の版の 240 : 28），テキストとしての権威はない。

289）［269］-319.

290）Roberts E84a（NYPL）.

291）Roberts E84c（UCB）.

292）Roberts E84d（USal）, in the Greenwood collection.

293）Roberts E84b（UT）.

294）［203］-267.

295）Roberts E40I. 6（UN）.

296）Roberts number なし（UN）.

297）上記脚注 38 参照。

298）91-182 ; ［325］-386.

299）p. liii と注釈及びテキスト比較資料参照（426 : 40）。

300）彼が同じ年の暮に見た *The Lost Girl* の初校の校正において，112 頁の約 70 箇所の訂正を行った。*The lost Girl*, ed. Worthen, p. xxxviii 参照。

301）Roberts number なし（UN）.

302）*Touch and Go*（1920）, pp. 5-12.

303）83-90.

304）*Phoenix II : Uncollected, Unpublished and Other Prose Works by D.H. Lawrence,* ed. Warren Roberts and Harry.　T. Moore（1968）, pp. ［289］-293.

305）Roberts EI3a（UCB）.

306）*Laughing Horse*, no. 20（Summer 1938）, 12-35 : Roberts EI3d（UT）.

307）Zeitlin は Los Angeles Public Library で DHL 原稿のフリーダ・コレクションの展示会を開くのを手伝った。Powell によって用意された展示会のカタログ : the manuscripts of d.h. lawrence 参照。

308）Roberts EI3e（UCB）.

309）Roberts EI3b（UCB）と EI3c（UT）.

310）［545］-548.

311）Zeitlin のタイプ原稿の 551 : 5, 552 : 5, 553 : 3 そして 37（テキスト比較資料参照）における誤りは EI に引き継がれているが，Curtis Brown のカーボンコピー・タイプ原稿にはない。この誤りは Zeitlin のタイプ原稿が EI の典拠であることを示している。

312）Roberts E273a（UT）.

313） Roberts E273b（UCB）.
314） *Phoenix*, ed. McDonald, pp. 811-16.
315） 第 1 カーボンコピー，Roberts E273d（UNB）。第 2 カーボンコピー，Roberts E273e（UT）。第 3 カーボンコピー，Roberts E273c（UCB）。第 1 には Curtis Brown, Ltd, スタンプナンバー ‘24’ と ‘MUST AWAIT AMERICAN RELEASE DATE’ の語のラベルがついている。
316） Tedlock 126.
317） Roberts E87a（UN）: MS の執筆，修正の詳細については Appendix VI 参照。
318） Roberts E87b（UT）.
319） Roberts E87c（UT）.
320） 例えば，503 : 30 ではロレンスは Brett が省略した ‘a’ をカーボンコピーに挿入した時，場所を間違えたに違いないことを PPI が示している。ロレンスは TSR（p. 77）で正しくしたようには，彼のテキストを ‘a man falling’ に変えないで，‘man a falling’ にしてしまった。PPI は ‘man a falling’（p. 100）に再びした。
321） PPI の現存している原稿は多くの場合，‘Deep’ ‘Might’ ‘Bolt’ のような語に ‘God’ ‘Lord’ を彼が置き換えたことを示している。注釈 439 : 30 参照。
322） DHL 自身による校正かもしれないものと印刷業者による句読点の変更とを区別するために取られた，この版における方法については pp. cxxiii-cxxiv を参照。
323） ‘Note on silent emendations’ 参照。
324） 植字工たちは短めの比較的高価な本のレイアウトには特に気を使うように言われていたに違いない。‘He’ ‘His’ ‘Him’ ‘Thou’ ‘Thee’ の中の ‘H’ と ‘T’ に新たに導入された大文字の幅の広さはしばしば行数の増加をもたらし，行線の引き直しがなされた。行の最後での語の分割を避けることに注意が払われた。この整理は PPI の段階で行われたものもあるし，PPII の段階でなされたものもある。例えば 121 : 8 と 121 : 9 での行線の引き直しは PPI の段階でなされ，PPII にも表れているが，77 : 24 と 77 : 25 での行線の引き直しは PPII の段階でなされたに違いない。
325） Roberts number なし（UN）。
326） DHL が p. 13 で 2 箇所の修正をして p. 14 をめくった時，その頁の半ばに連続した 3 行の終わりがぼやけているのに気付いたに違いない。彼はその破損個所に丸印を付けたが，その折りから丸ごとその頁を取り除き（連結した頁は標題紙でそれの左頁であった），破損がないと思われた控えの校正原稿から差し替えた。こうして唯一部分修正された頁はその他の点ではほとんど修正なしの副本原稿として現存している。
327） 上記 p. lxxviii 参照。
328） 185-312 ; ［67］-154.